

第二の人生

——高齢者の生きがいがいびくり——



玉手富士夫
(社) 角田市シルバー人材センター
常務理事兼事務局長

【たまたま ふじお】1943年生まれ。宮城県角田市出身。1962年4月角田市役所に就職。市民課を皮切りに総務部企画課、財政課、総務課など主に総務部関係を歩む。2004年3月角田市役所を退職、同年6月から現職。著書に「夢を紡いで42年」、「角田に生きる」、「乗って残そう丸森線（共著）」など

はじめに

平成一六年三月、数々の思い出を抱いて宮城県角田市役所を定年退職した。

「夢と誠意を持って仕事を進めれば必ず良い結果が生まれる」をモットーに四二年間、振り返ってみると苦しかった思い出はすべて楽しいものに変わっているから不思議である。しかも、幸運なことに退職後は、角田市シルバー人材センターで事務局長として再出発することができた。いま、ここで高齢者の生きがいがいびくりのお手伝いをしている。

私は、昭和三七年四月、地元の高校

校を卒業後、角田市職員として就職した。長く住んでいるふるさとの市役所に勤めることができたのは、自分にとって最高の幸せだった。同級生、恩師に恵まれ、多くの市議会議員とも顔なじみで、仕事を進める上で大きなプラスになった。

公務員時代の思い出

役所時代に忘れられない思い出がいっぱいある。

就職後、自分の学力不足を痛感して、働きながら大学通信教育を受けようという決意をした。四年間、夏季には四〇日の

スクーリングがある、猛暑と戦いながら東京のN大学へ通った。ありがたいことに、当時はその間役所の仕事を免除してもらうことができた。

苦労はしたが、仕事に関係する教養を身に付けたほか、全国に学友を得ることができたのは何にもまさる収穫であった。

市職員になって二二年目。係長に昇任と同時に「鬼市長」といわれた市長の秘書を担当した。一見おっかなびっくりだが、人情味あふれる人で、仕事のテクニクなど数多くの指導をいただく。秘書の仕事を担当して三年目に市長が病に倒れ、死別という悲しみに遭遇し

た。

また、昭和五六年ごろの国鉄（現JR）丸森線存続運動がある。東北本線槻木駅つきのきから南へ角田を経て丸森駅までの一七・四キロがこの路線だが、経営的に赤字路線なので国鉄の切り捨て候補にのぼっていた。市長から特別対策室勤務の辞令を受けて、住民と存続運動を進めた結果、第三セクターとして再スタートすることに成功した。

さらに、市の財政が厳しい時代に一年間ではあるが財政課長を経験したのは良い勉強になった。

一八歳の青二才が市役所の中に飛び込んだものの、仕事は右も左も分からず、途方に暮れた日々。長い年月、たくさんの出来事があった。しかし、今では全てが貴重な体験となった。私が



「夢を紡いで四十二年」を
自費出版

歩んだ足跡は決して平坦ではなく、むしろ険しい坂道が多かったような気がする。その度に、市民と同僚の皆さんに支えていただいた。正直言って、何度か失敗も経験したが、それを恐れてはいけない。誠実な心とチャレンジ精神をもって進めば、必ず大きな実を結ぶことを、私は痛切に体験している。そこで退職を機会に、仕事の要領が悪く、無知な一職員が周りの人に助けられながら、どう生き抜いたかを恥を承知で一冊の本にまとめた。役所時代に書き続けた日記帳が、この本「夢を紡いで四十二年」を自費出版するきっかけになり、改めて「継続は力なり」の言葉を実感した次第である。

恩師から事務局長の声かかる

さて、退職してから、角田市シルバ―人材センターにどうかと声をかけてくれたのはセンター理事長をしていた小学時代の恩師である。民間の事業所は初めてのことなので、勤まるかどうか心配だったが、少しでも役立てば、とお受けすることにした。

平成一六年六月、センターの総会で理事の同意をいただき、「長い市役所の経験を生かし頑張ります」とあいさつした。

センターには人生経験豊かな諸先輩

を含めて四二〇人が会員として登録している。条件は六〇歳以上であること、それに健康で働く意欲があれば誰でも入会できる。草刈りや植木せん定、大工仕事など三〇種目に長年培った技術に合わせて楽しく仕事をしている。

公務員退職者もハッスル

その中に中村末太郎さんがいる。地方公務員として二〇数年在職し、民生課長、総務課長、教育長などを歴任した。地域住民に関わってきた正にベテラン公務員だ。七九歳になる。

「役所時代に培った経験を生かし、何かの役に立ちたい」とセンター設立の平成六年三月に入会した。一四年前のことである。資源ゴミの受け入れと分別の仕事をしている。毎週日曜日の午前中二時間、市内の資源集積所に立つ。

中には分別もしないで、瓶、缶などを混在のまま持参する市民がいる。そんな時、中村さんは悪い顔をするのではなく、正しいルールをやさしく指導する。

「この仕事がぴったり合っていますので、自ら買って出ました。仕事を通じて捨てられるはずのゴミが少しでも資源化されればうれしいです。これから益々貴重な仕事になりますので、頑張



せんだ班員の出発前の打合せ

声かけ運動で事故防止

会員は働き者だ。真夏の夕方、草刈りの仕事を終えて事務所に戻る。作業服はべつとりと汗の結晶である塩が滲み、暑さと戦う顔は太陽に焼かれ、赤銅色になっている。みんな、猛暑にへこたれないで頑張っている。働くその姿に生きがいが見えぬ。

私はこのような元気な会員が大好きだ。会員の「出勤」は早い。仕事はほとんどが八時半から始まるが、七時半には顔を出す人もいる。資材器具が収められている倉庫のカギを開けるため、私も会員の出勤時刻に合わせる。「郷に入れば郷に従え」だ。

因みに私の役所時代の出勤時刻は八時一五分だった。今の三〇分早めの出勤は別段苦にはならない。会員が私を待っているからだ。「おはようございませう。今日はいい天気だねえ。局長さんも、はやいござ」と会員の元気な声が弾ける。

「いやー、みんなの元気な顔に会うのが、楽しみでえ。今日もケガがないようにね」、私は一人でも多くの会員に安全を呼びかける。局長の出勤はこうあるべきだと肝に銘じる。

センターでは、ケガや事故を絶対出さずしてはならない。みんなで誓い合っている。また、万一に備え、会員には定

期的に救急救命士の講習を受けさせることとしている。幸いに当センターでは、ほかのセンターと比較すると、ケガ、事故は少ない。平成一七年度は軽微なケガもなくゼロだった。この実績が認められ、翌年度の全国シルバー人材センター事業協会総会で、安全就業に尽くした功績が認められ表彰された。これも「声かけ運動」が実った結果だと自負している。

市民に溶け込むボランティア

当センターは、市から年額一千万円の補助を受けている。市民が汗と脂を流して納めた税金の中からこの補助を受けている感謝の気持ちとして、センターでは市民向けのボランティア事業を展開している。

運営方法は、高齢者がセンターのお陰で元気に働けることに感謝し、ボランティア事業基金として、会員が一口五〇〇円以上を寄付する仕組みである。特別会計を設け、平成一九年度は、三〇〇口、一五万円を予算に組んでいる。

この資金で、昔の子供遊びを今に伝えるための教材費や資料代などに当てる。昔の技を培っている会員は快く指導にも当たってくれる。

また、一月初旬に全国から一三〇〇人ほどのランナーが集まる市

ります」と意欲をみせた。

市民は、中村さんが高齢の身ながら、ひた向きに取り組む姿に感銘し、リサイクル運動に協力している。因みに中村さんが担当した集積所の実績を数字でみてみよう。昨年、平成一八年度の一年間の数は紙類が一九トン、缶類が一・三トン、瓶類が四・四トン、合わせておよそ二五トンになる。捨てられるゴミが貴重な資源に生まれ変わった。

中村さんは人柄と実績を認められ、平成一五年からセンター理事のほか、年二回発行する会報の編集長も務めている。



救急救命士からの講習（車座の中央が筆者）



通常総会でボランティア事業基金を説明



主催のマラソン大会コースの草刈りと清掃を行っている。朝七時の早朝にもかかわらず一二〇人の会員が集まり、「センターのボランティアは、すっかり市民に溶け込んだ」と市民から評価されている。市民と共に歩むセンターは、今やなくてはならない存在になった。この基金制度は、全国にただ一つしかないと思う。

角田市長も「今や人生八〇年が名実共に備わった長寿社会となり、会員が精神的にも肉体的にも元気に社会で活躍されていることは何よりです」と会員にエールをおくる。

人生経験の多い先輩会員と歩んできたセンターでの生活は、あつという間に四年半が過ぎた。生きがいを持ってひたすらに歩み続ける会員の姿は生き生きとし、老人臭さは少しも感じられない。私には明日への活力源となっている。役所生活では味わえない数多くの勉強ができた。

それにつけても健康第一。今までの教えを大切にして、これからの人生に生かしたい。

おわりに